

都立一商奨学会 35 年の歴史

平成元年(1989 年)4 月に産声をあげた都立一商奨学会(任意団体)は、直接的には校外施設・丹沢寮の売却代金 1 億 3 千万円を原資に発足しました。そもそも丹沢寮を含め田園家術などの校外施設や創立当時の一商教育を特徴づけていた世界水準の先端技術や機械の取得は、残されている記録から第 1 期～第 10 期の卒業生の保護者が図書購入費の名目で寄付された約 12 千円(現在価値・約 30,000 千円)から支弁されていたと考えられています。そのことは、都立一商奨学会規約第 2 条「本会は、一商卒業生の出資を基金として東京都立第一商業高等学校の発展と名誉を高め、優秀な人材を育てることを目的とする」と記述されていることからも明らかであり、一商の奨学金制度は先輩方の遺徳そのものといってよいでしょう。

また、田園家塾借地返還時は同地周辺一帯が住宅需要の高まりで土地価格が高騰していたこと、丹沢寮処分時も土地バブルの影響で土地価格が高騰していた時代で、一商としては期待以上の売却額となつたという幸運にあづかったのです。

都立一商奨学会第 1 回(1989 年)の奨学生は 6 名(各学年 3 名)で奨学金給付額は年額 120 千円(総額 720 千円)という記録がありますが、それ以降の記録は残念ながら見つかっていません。発足から 15 年後の平成 15 年度(2004 年)に、1 億 3 千万円の利付国庫債券(年利 2%、償還 30 年)を取得し、その利子 2,800 千円(年額)を奨学金給付額に充てることになりました。

そして、平成 30 年(2018 年)11 月に任意団体を承継して一般財団法人に組織替えを行い、令和元年(2019 年)4 月 1 日付で公益財団法人の承認を頂いて現在に至っています。以降、毎年 27 名を奨学生として選抜し、一人当たり 80 千円の奨学金を給付しています。

また、平成 30 年(2018 年)に都立一商創立 100 周年を機に、在校生を対象に短期海外留学事業を開始しました。しかし、コロナ禍により令和 2 年度、3 年度は中止せざるを得ませんでしたが、在校生の留学への期待が高いこともあり令和 4 年度には復活させ二年生、一年生各 2 名を英国への短期留学を再開させました。この費用は同窓生から寄せられる単年度ごとの寄附金をもって充てています。